特集

—盛岡さんさ踊り—

復興を願う思いを結集させて。

気がつけば、暦はもう7月。
夕暮れ時、街のあちこちに響くさんさ太鼓の音色に、
改めて安らぎを感じる方も多いのではないでしょうか。
今年34回目を迎える盛岡さんさ踊りは、
郷土復興を願う人たちの思いを結集させた絆の証。
その一つ、岩手大学の学生との共同による
「笑顔の街角プロジェクト」は、
これまでと違う視点で始まった新しい試みです。

学生からの提案でスタート

岩手大学は、数年前から地域や地元企業などが抱える課題を、学生が研究テーマとして取り組む「地域課題解決プログラム」を行っています。

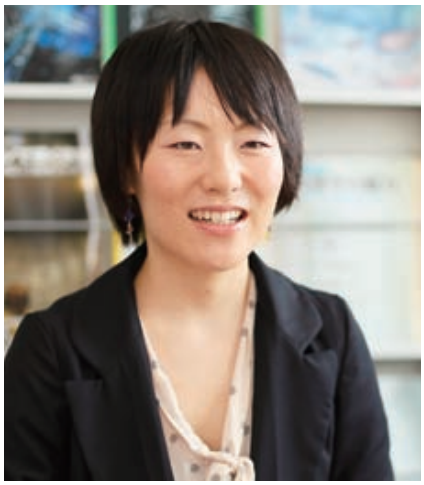
さんさ踊り実行委員会では、昨年度このプログラムに応募し、「盛岡さんさ踊り」の新たな発展策やPR方法、企画案を2人の学生から提案してもらいました。盛岡さんさ踊りをもっと盛り上げるために、現状の把握、他地域の取り組み事例調査などを丁寧に行い、県外と県内両方を視野にいれた企画を組み立てた2人。昨年秋に発表していただいた研究成果をもとに、さんさ踊り実行委員会と岩手大学の共同事業、「笑顔の街角プロジェクト」を実施することになったのです。

昨年度、同企画の提案をした溝口曜子さん、木村秀さんと五味先生、そして商工会議所の職員たち。

では「笑顔の街角プロジェクト」とは、どんな内容なのか。それは、盛岡市中心部の街角に、市民や県民の皆さんの笑顔をとらえた巨大なパネル写真を集めて設置するというもの。より多くの人たちが盛岡さんさ踊りを身近に感じられるよう、笑顔の写真を通じて一体感を演出したいと考えています。目標は約100人。各写真には、盛岡の好きな場所や食べ物、さんさのPRコメントなども掲示されます。

さんさ踊りへの新しい参加スタイルとして

さて、このプロジェクト実施にあたって、岩手大学とさんさ踊り実行委員会メンバーからなるワーキンググループを編成し、詳細を進めてきました。そして、起案者である2人の学生が卒業した3月、プロジェクトは後輩へと引き継がれたのです。大事な思いを込めたバトンを受け取ったのは、人文社会学科4年の佐々木愛さん。活動が本格化する直前の6月、佐々木さんを訪ねてみました。



「このプロジェクトは、今までさんさ踊りに興味がなかった人も、身近に関わる機会の一つとして提案したもの。例えば、お子さんが小さくて、さんさ踊りに参加できないという方、いつもＴＶでしか祭りを見ない高齢の方なども、写真のモデルになったり、街角に掲示された写真を見ていただくことで、いつもと違うさんさ踊りとの関わりが生まれたらと思います」。

そう話す佐々木さん自身は、子どもの頃からお祭りが大好きだったそうです。大学に入学後も、岩手大学チームの一員として盛岡さんさ踊りに参加。「全員で練習をしてきた成果を発表できる一体感」の楽しさを知る佐々木さんですが、このプロジェクトを通して「盛岡さんさ踊り」の舞台裏を知ることで、さらなる責任感が生まれたそうです。

「今までは祭りの参加者の一人として、準備された会場でチームの踊りを成功させることに全力を注ぎました。ところが今年は、実行委員会の会議にも出席させていただき、皆さんと一緒に準備に参加している一人。祭りの準備は1年前から進んでおり、その苦労も知りました。チームの枠を超え、祭り全体の当事者として関わるプレッシャーは大きいですが、4日間の成功を目指して頑張りたい」と、熱い気持ちを抱える佐々木さん。

祭り会場への期待感が膨らむ、街の仕掛けづくり

佐々木さんの指導教員である同大学人文社会学部・五味壮平准教授は、先輩たち2人の企画段階から、プロジェクトの進行を見守ってきました。計画段階から実行段階に移り小さな課題も多々ある中、今回の取り組みに期待することを伺ってみます。

「実行委員会の会議などに出席させていただくと、祭りの場所、時間なども制約がありますし、すでに様々な工夫がなされていることがわかりました。しかし、さんさ踊りは夜のパレードがメインで、昼間は盛岡駅から中央通りまで、祭りを予感させるものが少ない。

今回のパネル写真の設置場所は大通が中心ですが、盛岡駅東西自由通路のさんさこみち、クロステラス盛岡の壁面なども利用させていただき、歩くほどに、時を刻むごとに「盛岡さんさ踊り」に近づいていく…。そんな期待感を作りあげていきたいと思います。今回の写真や祭りのアイテムが少しずつ視覚に飛び込んでくることで、さんさ踊りへのイメージが膨らむきっかけになればいいですね」。

岩手大学人文社会学部・五味壮平准教授。同プロジェクトのワーキンググループのメンバーとして、学生自身の主体的な活動をサポート。

サンプル写真を持つ佐々木愛さん。写真撮影、展示の手法やパネルの作成など、これから本格化する作業に向け、プレッシャーもありますが、その言葉には意気込みが溢れています。

1枚のパネルは、佐々木さんの体を覆うA1版程度の大きさを予定。メイン設置場所は北日本銀行大通支店の壁面一面を予定しています。写真撮影はまだ始まったばかりですが、街中で声をかけたり、少し郊外へ出向いたり、地道に歩きながら老若男女幅広く集めるつもりだと佐々木さん。初めての企画ゆえに、果たしてどれだけの人が撮影に協力してくれるのか、少し不安もありますが、今年は試行段階。これを機に、季節の定番企画になるべく展開していきたいと力を込めます。

例年通り4日間開催となる「盛岡さんさ踊り」。市民と観光客、参加者と見物者、そして地元の人同士をつなぐ「笑顔の街角プロジェクト」は、震災復興への足掛かりとして、独自の視点から祭りを捉えた試みといえます。学生の提案が地域とつながり、そこから後輩へと受け継がれる「さんさへの思い」。地元の祭りが育むものは、市民が感じている以上に大きいのかもしれません。

もうすぐ、街角に登場する笑顔の写真の数々に触れ、開催当日は、ぜひ、さんさの踊り手たちの熱い演舞をご覧ください。

取材／「ＳＡＮＳＡ」企画編集委員会